

どどこがスゴイか 南部陽一郎



●なんぶ・よういちろう/1921年 東京生まれ。42年東京帝大理学部卒。大阪市立大教授、プリンストン高等研究所、シカゴ大学助教授、教授を経て名誉教授。70年にアメリカ国籍取得

「南部、益川、小林の三氏にノーベル物理学賞」というニュースを聞いた途端、南部陽一郎は世界最高の物理学者と確信して三〇年間「追っかけ」て来た私は、嬉しくて飛び上がりましたが、同時に「なぜ南部さんの一人受賞

でなかったのだろう。世界最高の南部さんには、そこそがふさわしかったのにも思いました。

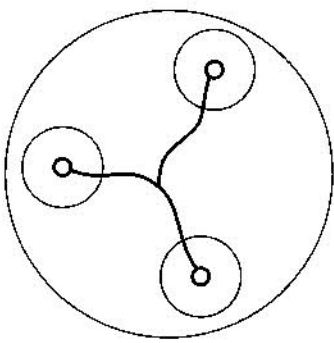
実は、そう感じている物理屋は相当いると思います。南部陽一郎を高く仰ぎ見て敬愛する専門家は多いからです。では、なぜ偉いのか。それは、この五

〇年間の素粒子理論の研究のすべての面で先鞭をつけ、研究全体をリードしてきたのは南部だからです。南部陽一郎の名を抜きにしては、現代の素粒子理論のどの面も語れません。クォークが多次元の「ひも」で結ばれているという「ひも理論」、湯川秀樹の中間子理論を大きく進化させた「色の量子力学」、素粒子の質量を決める理論である「ヒッグス機構」、そのどれを取っても最初の発端は南部のアイデアです。

南部は現代素粒子理論の骨組みをつくったような人だ

現在の素粒子論では陽子も中性子も素粒子ではなく、その三分の一のかけらに相当するクォークが素粒子であることが確定しています。このクォークを考える決定的一步になった「西島ゲルマンの公式」も、実は南部が西島和彦に与えたヒントが基礎になっていると言われています。

つまり、南部は一人で「現代素粒子理論」の骨組みをつくったような人です。物理学者としての「仕事ぶり」＝「頭の働き」は、まさに「すごい」と



●ひもで結ばれた3個のクォークがバリオン。バリオン＝陽子、中性子